

シンポジウム「<身>を生きる臨床とは」
—心身医学より“身”を考え臨床に生かす—

中井吉英

関西医科大学名誉教授 弘正会西京都病院名誉院長・心療内科部長

心療内科医として私が体験的に考えてきたもの、それが“身”である。

従来の医学・医療モデルは Biomedical model である。このモデルでは普遍性、再現性、客観性が要求される。病気の原因となる各要因の関係性や個別性、心理、社会、人間性といった曖昧な情報や要因を切り捨てるか無視しなければ成立しない。これに対して、Engel は bio-psycho-social medical model を提唱した。病気を原因—結果といった要素還元主義から、システム論的な視点より、それぞれの要因の関係性、個別性に焦点を当てた非要素還元主義的モデルである。このモデルが心身医学の医学・医療モデルである。さて、心身医学は非要素還元主義からの脱却を目指し出発したはずであったが、心身相関という心と身体の二つの要素に還元してしまうという重大な過ちを犯した。

“身心一如”と言ったのは禅僧栄西である。さらに道元は“身心脱落”といった。いわば心と身体二元性が消失し、心は客体としての身体と対抗する主体ではなくなる。しかも心と身体と自然は不可分の一体性において存在していると彼らは考える。

さて、“身(み)”とはなにか。身=身体ではない。“身体”は精神”と対立するものとして考えられ、英語のボディとマインドといった二分的な考えを連想させる。わが国で“身”は広い意味をもち、われわれが生きている身体のダイナミクスをよく表現している。“身”のなかにすでに心は抱合し統合され、“身”は心より上位に位置する。“身”は bio-psycho-social-spiritual 全体を包括しているわけである。したがって“身”は、日本固有の概念である。このような“身”の考えは、わが国固有の治療技法である絶食療法、内観療法、森田療法に通じ、自律訓練法、バイオフィードバック療法、フォーカシング、マインドフルネスにも関係する。これらの治療法が未来の医学・医療のなかに組み込まれないかといった視点より、身心一如としての身体観とそれらを臨床に生かす方法について考えてみたい。

略歴 中井 吉英 (なかい よしひで)

京都市生れ。1969年関西医科大学卒業、同大学大学院医学研究科入学(内科学専攻)。1972年九州大学医学部心療内科入局、助手、講師を経て、1986年関西医科大学第1内科学講師、助教授。1993年関西医科大学第1内科学講座教授。2000年関西医科大学心療内科学講座初代教授。2009年関西医科大学定年退職。同年より関西医科大学名誉教授、関西大学客員教授(臨床心理専門職大学院)、洛西ニュータウン病院名誉院長・心療内科部長。2015年より現職、現在に至る。日本心療内科学会前理事長、日本心身医学会理事長歴任ほか。専門分野は心身医学、消化器病学、疼痛学、医療行動科学。

主な著書に、「生老病死の医療をみつめて-医者と宗教者が語るその光と影」(編著、ミネルバ書房 2016)「食と心-その関係を解き明かす-」(編著、建帛社 2015)、「心身医学の最前線」(監修、創元社 2015)、「日独文化研究所シンポジウム「生と死」」(共著、こぶし書房 2014)、「全人的医療入門」(単著、中山書店 2013)「医療における心理行動科学的アプローチ」(監修著、新曜社、2009)、「いのちの医療」(単著、東方出版、2007)ほか。